一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10－10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42－0211
定価　1部　150円
㈱橋本清文堂

創立百周年にむかって

一泉同窓会会長　渋谷亮治

はからずも、同窓会長という大役をご指名頂いてから早くも一年近く、もう本年度の総会のご相談や準備を始めねばならぬ時期になりました。

早々に大先輩や又、後進の若い泉ヶ丘委員にも副会長をお願いし、早くも八年先の百周年の論議が交わされた常任委員会にも多数ご参加を頂いて、一泉の同窓生の集いの力強さとぬくもりを痛感させて頂きました。

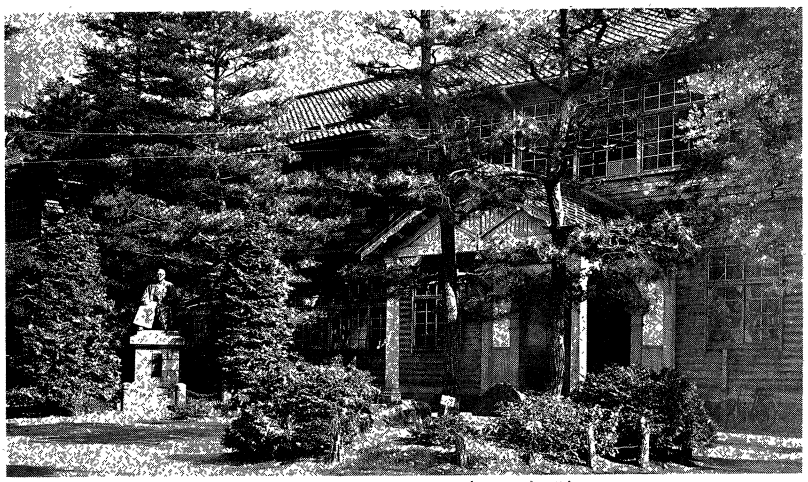
所で、ふって湧いてきたのが石川県選挙区参院議員選の問題で、私共五四回同窓の前建設省技監の沓掛哲男君が、曲折の末自民党公認を得、御承知の通り無事初当選を果たしました。同窓会としては、有志後援の会として一部副会長の皆さんに世話人をお願いして、それなりに支援体制を取りましたが、問題はむしろこれからの六年間の充実した活動後援体制をどう組むかにあろうかと思います。ご意見ご指導を賜わりたくお願いを申し上げます。

又、永年にわたって文字通り同窓会の要めとしてお世話を頂いてきた西多事務局長が、この辺でお休みをしたい、しかし百周年のための資料集めや整理は出来るだけお手伝いするからとの強固なお申し出で、常任委員会の皆さんにはかって副会長として残って頂いて、堀口渉さん（45期）に後任事務局長を引き受けて頂くことでスムーズに事が運んで感謝を致しております。

さて、本年度の総会も十月十五日に行われますが、会場は例年のニューグランドホテルか、九月二十日に新装オープンになる香林坊大和になるかまだ決まっておりません。ただ、出来るだけ若い泉丘出身の方々にもっと多く出て頂きたいという希望を持っており、総会、パーティーの運営も出来れば泉丘の数期ごとに担当持ち廻り制でやって頂きたいと願っております。アイデアを事務局の方へもお寄せ下さい。

又、五月末には関西一泉の総会に出させて頂き、おめでたの八十島会長さん始め、担当期の若い泉丘会員の方々とも歓を尽くして参りました。又、松任一泉の総会では、私の同期の三菱総研の宮川氏の講演もあり盛会でありました。

いずれにしても百周年を目指して年々新会員も増加して参り、全国にわたって同窓会活動も活性化されてくる事は大変喜ばしい事であり、全会員の皆様の御健勝をお祈り申し上げて筆をおきます。



大正初期の金沢一中校舎（正面玄関）

「一泉」第十二号によせて

泉丘校蔵書解題目録の編集を終えて (9)

古活字版太平記(泉丘本)とキリシタン版「太平記抜書」

山森青硯（一中三十三回卒）

太平記（以下泉丘本と云う）は四〇巻目録剣巻二一冊

慶長一五年(一六一〇)刊　二八×二〇

蔵書印「金沢学校」「石川県尋常中学校蔵書章」

とある。日置謙先生は、活字版の新古を慶長と教示され、慶長以前の活字本を古活字版と命名された。然し乍ら現世では寛永迄に下り、甚しきは慶安迄に下っている状態である。

太平記の活字本を列記するならば、慶長八年(一六〇三)慶長十年(一六〇五)慶長十二年(一六〇七)慶長十四年(一六〇九)慶長十五年(一六一〇)元和二年(一六一六)寛永元年(一六二四)慶安三年(一六五〇)と最も多く、異本も極く僅少。慶長十五年古活字版は、

キリシタン版太平記抜書

単辺、無界、十二行片仮名交り。活字は稍小型に属す。匡郭内、縦七寸六分、横五寸五分半。巻末に「慶長十五暦庚二月上旬日　春枝開板」の刊記あり。春枝に就きては未詳なるも、慶長十一年に四体千字文等の刻あり。（古活字版の研究五四三頁）となっている。

泉丘本は「慶長十五年暦二月上旬日　春枝開板」と巻末にあり、堂々たる古活字版である。筆者、管見の伝本極めて多く、我邦十四本に達しているが、完本(欠本なし)は我が泉丘本一本である。泉丘本と他本との異りを示せば、岩波版日本古典文学大系三十四「太平記一」十五頁に慶長十五年片仮名交り十二行古活字本（巻末に慶長十五年暦庚戌二月上旬日　春枝開板とあり、この本から総目録を別冊とする）元和二年仮名交り十二行古活字本（巻末に時丙辰歳次元和孟秋上旬日とあり、この本から総目録と剣巻とを合せて別冊とする）は同じ特色をもちその差は誤字程度である。とある。慶長十五年古活字は、目録のみ別冊と述べているが、泉丘本は、剣巻と目録併せて一冊となっている。川瀬一馬先生著「古活字版の研究」第二編五四二頁には、

慶長十五年春枝刊本で、有刊記本としては本書より剣巻が附載せられる様になった。

とあるから、泉丘本に剣巻が附いているは当然であるが、他書との異りは前記剣巻と目録併せて一冊となっていることである。

もう一つ泉丘本の特色と云えば、同じ慶長十五年(一六一〇)に、我が郷土に最も近い京都に於いてキリシタン版「こんてむつす、むん地」四巻一冊」が出版されている。印刷所は京都アントニオ印刷所である。同じ古活字版と雖も、我邦本来の古活字版とキリシタン版（古活字版）と同年版と云うことは極めて稀異と云わね

学校新聞

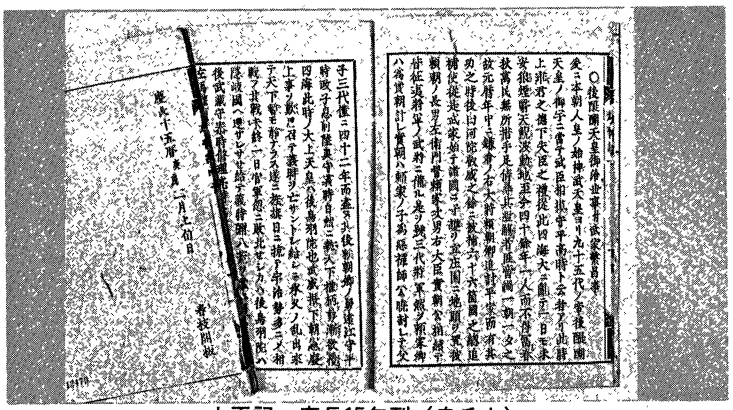
「桜章時報・いずみの原」縮刷版の発売について

母校創立九十周年記念事業の一環として昭和十二年より昭和十七年にかけての旧金沢一中時代の学校新聞「桜章時報」の全号と昭和二十三年の旧金沢一高時代から現在に至る「いずみの原」全号の縮刷版が刊行されました。卒業された皆様には青春時代の往時の思い出として興味ある記録かと存じます。

同誌をご希望の方は、金二、五〇〇円（送料共）ご送附の上当事務局宛お申込み下さい。

◎縮刷版　レザック表紙
A4版五八〇ページ

〒921　金沢市泉野出町三―十―十
一泉同窓会
郵便振替
金沢〇―四二五四
Tel〇七六二(42)〇二一一



太平記　慶長15年刊（泉丘本）

ばならぬ。

泉丘本と同題箋キリシタン版「太平記抜書」は六巻六冊　刊年刊行地未詳」は、明治三十一年（一八九八）サトー氏 **Sir E. Satow** により金沢にて発見され、時の内大臣田中光顕氏に贈られたが、後、内野五郎三氏の手に帰し、次いで戦後天理図書館に収蔵された、現存唯一の完本である。

（国字本、漢字平仮名交りの史書太平記の抜書）

尚本書の裏打より発見された、同断簡二葉はしばしば金沢に於て展観になっている。

現今迄発見された「キリシタン版」約二十九種中、刊年刊行地未詳は、此の太平記抜書一種である。

筆者按うに同年出版「こんてむつす、むん地」印刷地、於京都我国最後年キリシタン版でなかろうか。近年昭和三十七年十二月二十日、京都市立西京高等小学校、高橋貞一氏の「キリシタン版太平記抜書」にはキリシタン版太平記は如何なるものを底本としたかというに、慶長八年富春堂刊の太平記から慶長十五年刊以前の太平記などが、その底本として推定せられる。

と。キリシタン版「太平記抜書」底本を、慶長十五年古活字版を極力推奨しておられる。

筆者慶長十五年古活字版（泉丘本）を、極力キリシタン版「太平記抜書」底本として推定したい。そは他の慶長本といちじるしく異なる所が見うけらるるからである。逐一類似句を摘出、例示したいが紙面の関係省略、乞う「金沢泉丘高等学校蔵善本解題目録」に摘記す。読者諒とされたい。

（註）サトー氏は「薩道懇」日本名で刻した明治十四年刊「清朝史略」と云う本が泉丘校に蔵す。

会員小品展

一泉俳句

宇野憑子（通信十四回）

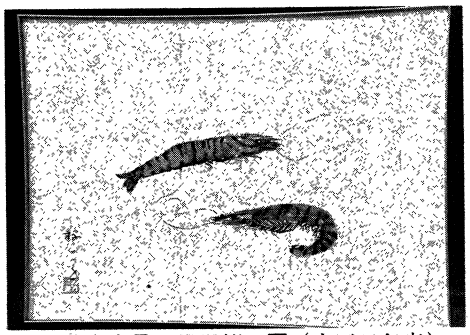
若布刈　舟少し傾ぎて　移りけり

裏山に　卯浪とどろく　休め窯

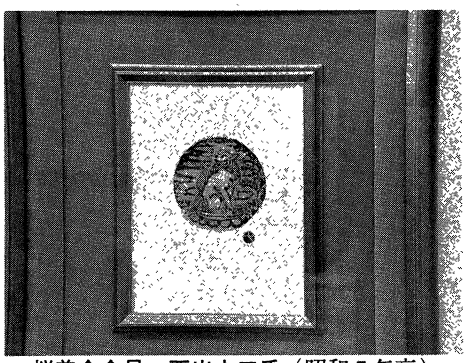
桶担ひ　汐こぼしゆく　夏蓬

塩田夫　洗ひざらしの　衣固し

海女町の　注連新らしき　花茨

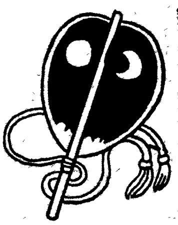


桜美会会員　黒田桜の園（大正11年卒）



桜美会会員　西出大三氏（昭和７年卒）

同窓の随想

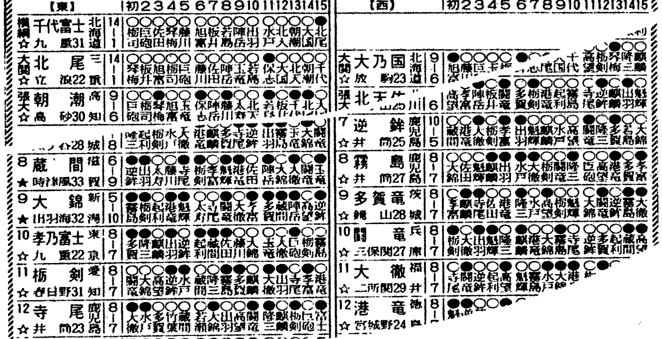


金沢と逆鉾・寺尾

押村孫二
（二中二十九回卒）

相撲界の人気力士である逆鉾と寺尾の二人は兄弟で、金沢一中卒で私と同期の寺尾政喜氏の孫であることをお知らせしたい。大正及び昭和の初期に金沢市の金石海岸にて開催された石川県下中等学校（金沢医専も参加）の相撲大会は石川県スポーツのメーンエベントであり、金沢一中は常に強力を誇ったものであるが、私の在学時代相撲部の主将は吉藤文英氏、次の年は寺尾政喜君であった。好敵手金沢二中の主将は石油業界で成功した南部政二氏であった。私も中堅位で三年と四年の二回出場した。寺尾君は県下でも有名な存在となり遂に卒業後大相撲に入門した。当時金沢市出身の兼六山と称する十両力士がいた頃のことである。寺尾君と私の間柄はその後、私が東京の明治製菓に入社してから一層親交が深くなった。当時明治製菓の出入の洋服屋に足立さんという大変な相撲ファンがいて、この人が加賀錦（寺尾君のシコ名）と私が同窓生であることを知ってから時折加賀さん加賀さんと云って話題を賑わしたものです。

　その後戦争が始まり寺尾君も相撲界から国会議事堂の警護官となり金ボタンの制服を身につけていました。戦後は相撲サービス会社の取締役に転じました。その内に明治製菓が缶入ジュースを試売することになり、私の友人の本部君から国技館で同品の販売を試みるよう取次方を依頼され、寺尾君に頼んで採用してもらいました。その会合の際寺尾君より同氏の長女節子さんが、双差しの名人と云われた関脇鶴ヶ峯と結婚するという目出度いお話を聞いたのです。因に寺尾政喜氏の奥さんは鹿児島県出身の横綱「源氏山」後に「西の海」と改名した人の長女文子さんです。この夫婦の仲に一男一女あり長男は慶大卒（現在全日空勤務）、その後年転じ月変り右鶴ヶ峯と節子さんの間の長男が福薗関として十両筆頭まで進んだが、負傷のため幕下に落ち、次男が逆鉾、三男が寺尾です。母方の姓をシコ名として目下幕内で活躍して、共に幕内有望力士として国技館を湧かしていることは御承知のとおりです。殊に逆鉾は関脇二場所の実績もあり、寺尾は押し技に抜群の技を有し、両者共年齢も若く前途有望と思います。父親鶴ヶ峯（現井筒親方）は鹿児島出身のため両者も鹿児島県の出身となっておりますが、母親は寺尾政喜氏の長女だから石川県人の孫といってもよいかと思います。なお、寺尾政喜君は人格温厚で書道に優れていたので、金沢一中のスポーツの檄文は大抵寺尾君が書き、体育館に貼り出されたことを記憶しております。



昭和61年7月21日
大相撲名古屋場所星取表
○－勝ち　●－負け　□－不戦勝　■－不戦敗　や－休場
☆－勝ち越し　★－負け越し
部屋名の次の数字は年齢

【東】	出身	成績	【西】	出身	成績
横綱 千代富士 ☆九重31	北海道	14-1			
大関 北尾 ☆立浪22	三重	14-1	大関 大乃国 ☆放駒23	北海道	9-6
張大 朝潮 ☆高砂30	高知	9-6	張大 北[illegible]	[illegible]	[illegible]-6
[illegible]28	[illegible]城	8-[illegible]	7 逆鉾 ☆井筒25	鹿児島	10-5
8 蔵間 ★時津風33	滋賀	6-9	8 霧島 ☆井筒27	鹿児島	8-7
9 大錦 ★出羽海32	新潟	5-10	9 多賀竜 ☆鏡山28	茨城	8-7
10 孝乃富士 ☆九重22	東京	8-7	10 闘竜 ☆三保関27	兵庫	8-7
11 栃剣 ☆春日野31	愛知	8-7	11 大徹 ☆二所関29	福井	8-7
12 寺尾 ☆井筒23	鹿児島	8-7	12 港竜 ☆宮城野24	徳島	8-[illegible]
13 魁輝	青森	8-[illegible]			

　このような優れた人柄を見こまれて、元横綱「源氏山」の長女文子さんと結婚され名門の相撲茶屋「吉可和」を経営しておられます。又一世を鳴らした大横綱双葉山の生存時代同氏一族が戦災に遭遇されたとき、寺尾家で大変御世話をされ親交を結ばれたことも承っております。又、金沢一中当時の相撲仲間であった黒田千吉郎（東京美大相撲部主将、共同印刷会社重役兼博文館新社々長故人）や坂本勝治氏（実業家）及東京都水道局の拡大に努められた元水道局長小林重一氏（政治家、河野一郎時代）とは親交があった。寺尾君は吾々のクラス会の席で孫が三人も相撲界に入ったが、幕内に出世してくれないと頭が痛いよといっていたが、故人となられたのは残念なことです。「木静かならんと欲して風やまず」の諺通り人世又無常かと思います。

幽霊今昔

大森玄衆
（一中三十五回卒）

「本多の森」といえば一中旧校舎を憶い出す。巻脚絆姿で登校していた大正時代の話――その頃は松金電車というものがあり、白菊町を起点にして松任までと、途中別かれて鶴来までを走っていた。その分岐点の野々市は田圃の真中の小さな町であった。

この町から通っていた学友が三名いたが、夏のはじまる頃よく「おい、亡主火を見に来んか」と誘ってくれたものだった。今の泉丘校舎の南東に高尾山がある。二百メートル足らずの小高い山だが、この山の上空から野々市の方に向けて火の玉が夏の夜空を飛ぶのを町の人々は夕涼みの縁側から眺めていたらしい。

「越登賀三州誌」（一八〇五年著）には、「富樫政親死するの際より、燐火この高尾山間より出づ。世俗、今これを高尾の坊主火（ぼうずび）という。政親の亡魂、怨結して化するもの耶。四百余年を歴て今猶消却せざること哀しむべし……」とある。

五百年もの永い間、加賀の国司として善政を布き、民百姓から敬慕されてきた富樫家も二四代政親が一向一揆との戦いに敗れ、高尾城で自刃し宗家の滅亡となったのは一四八八年、やがて五百年近い歳月が流れている。

その亡主火も今は見えない。毎年八月一日、二日野々市は全町あげて「じょんがらまつり」で賑っている。

昔、夏になると幽霊の飴買い話もよく聞かされた。江戸時代の中期、金石の導入寺（天台宗）の近くに板屋という飴屋があった。毎晩大戸をおろす頃に若い女性が一文銭を持って飴を買いに来た。その女性の手が妙に冷たいので不審に思った主人が後をつけてゆくと道入寺の墓地に女は消えていった。住職に事の次第を告げると思いあたる節があってか住職は暫く前に土葬した身重の「たみ」女の墓を掘り起こしたところ、生後七日ぐらいの男の子が飴をしゃぶりながら生きていたという。この話の後日譚としてこの赤子が住職の手で育てられ後に七代目住職境応となりたまたまこの寺に宿泊した円山応挙に未だ見ぬ自分の母の姿を絵にしてくれと頼んで画いて貰った幽霊の画幅が今も寺宝として道入寺に残っている。

しかし幽霊の出るのは昔ばかりではない。先日の週刊誌に、若くして死んだアイドル歌手岡田有希子の亡霊がジプシークイーンを歌っている中森明菜の背後に現われたのを見たという若者が何人も出て話題になっているという。幽霊はやはり現代でも健在か。

平均寿命が延びて八十年といわれているが、まだその先に幽界があると思うと楽しみにもなる。六道輪廻のことばが思い出される夏の夜のこの頃である。

人間国宝 西出大三君の自序伝

山瀬芳男
（一中三十九回卒）

一中三十九回卒の西出大三君が昨年二月二十三日に人間国宝（截金無形文化財）になられた。我々同期七桜会は心から祝福をし、ここに西出大三君の自序伝をご紹介して今後の益々御清穆を祈り上げます。

西出大三君
人間国宝（重要無形文化財保持者）
日本工芸会参与理事
日本伝統工芸展鑑審査委員

北前船の船問屋
十二代西出家の出身

私の家は、旧江沼郡橋立村字橋立（現在の加賀市橋立町）で、代々続いた北前船の船問屋でした。祖父・西出孫左衛門は千島や北海道の漁業権の殆んどを持ち、小樽や函館に倉庫なども多数あり、かなり羽振りが良かったと聞いています。十一代目に当たる父の季吉は明治時代に慶応義塾大学を出て、福沢諭吉先生に直接教わったそうです。先生の直筆の掛軸や書も家には沢山ありました。

私の母は、初代金沢市長・稲垣義方の娘で橋立の西出家へ嫁に来たのです。金沢の母の実家の稲垣の家で生まれた私は双子の兄で、弟は大四郎と名付けられましたが戦病死してしまいました。稲垣の祖父は多芸で乗馬を好み、家には能舞台や相撲場までありました。

私は小学校のとき金沢へ移り、長町小学校から女子師範付属小学校に入りました。この学校はユニークな先生が多く、私は手工の先生に版画を彫れと言われ、下駄の歯を使って彫刻したり、理科の先生からは昆虫採集をすすめられ、珍しくタテハ蝶のサナギから寄生蜂の幼虫が出たので、京都大学へ送ったところ、岩佐八郎先生から丁寧な手紙に学名をつけてもらったりまでしたことから、

私は将来京都大学に進学するつもりでいたのですが英語数学が苦手だったので、結局、彫刻の方を生かして金沢一中から東京の美術学校へ入学した事がこの道に進んだはじまりです。

私の専門は「截金」といいますが、一般にはあまり知られていないみたいです。象嵌とは似て非なるもの。鹿のなめし皮に葛の粉をひき、金箔をのせて竹で切っていく、細かい仕事です。秘法といえば秘法でしょうが、毎日変わるんですよ。（笑）造型から加飾まで全部作成するため、一年に一点か二点しか作品が出来ません。

若い頃からよく奈良の方へ仏像の勉強に行きました。弘法大師の千五十年遠忌の陳列に手伝いをしていて、家内と出合いました。彼女も山中大正堂の文化研究所に勤めていたのを疎開で奈良へ来ていたのです。

高村光太郎氏より
書簡七十二通

私はこれまで多くの人と出合い、多くの方から教えを受けました。薬師寺長老の橋本凝胤師、東京美術学校の矢代幸雄先生、ドイツ特命全権大使で枢密顧問官だった小幡酉吉氏、作家の野上弥生子さん、唐招提寺長老の北川智燦師…等々。

なかでも、高村光太郎氏（「智恵子抄」などの作者）との交友は忘れることが出来ません。最初ご尊父の高村光雲氏の回顧録を国語の教科書で読んで感心し、彫刻家と書いてあり本人だと思って手紙を出したのです。それから書簡のやりとりを続けました。光太郎氏が空襲で焼け出されて東北へ行かれてからも、私は東京裁判の傍聴記などを送り、それに対する感想などもいただきました。往復書簡は七十二通もあり、般若心経の中の「不生不滅」の書もいただきました。あの方の影響により、私の仏教への想いが深まったと思います。

私は今、多くの人との出合いを心の糧としながら、仏像を彫り、截金の仕事をしています。

（おあしすより）

迎日飛行場の想い出

八木田　喜　良
（一中四十五回卒）

昭和二十年八月十五日、此の終戦の日を私は南朝鮮の迎日で迎えた。基地は東海岸の迎日湾に臨み、浦項港からすぐ近くの台地の上に、千二百米位の滑走路が急造されたもので、未だ施設の手が十分入っておらず、滑走路以外の地盤は極めて軟弱、飛行機は勿論、車輛でも一度入り込んだら、全く動きがとれなくなる状態であった。

この基地に進出を命ぜられたのは、七月上旬の事。当時私の攻撃第七〇八飛行隊は、沖縄作戦における桜花攻撃の親飛行機部隊としての任務も一段落し、小松基地に全員勢揃いし、本土決戦に備えて訓練に整備にと全員眦を決していた。一部はテニアン、サイパンへの片道攻撃の為（剣作戦）三沢基地に進出をしたが、当時我が要撃戦闘能力は低下しており、空襲に依る地上被害を少しでも最少限にと、隊の半数の兵力である陸上攻撃機（一式陸攻）約二十数機が、迎日基地に分散と決定されたのであった。

現地調査の結果、飛行場は前述の通りで、僅にエプロン地区に陸攻四機程度を繋留するスペースしかないとの事。繋留地の整備を急務とし、逐次後続機を進出させる事として、やむなく四機を率いて、天候不良で一旦蔚山陸軍飛行場に着陸後、迎日に進出したのは終戦一ヶ月前の七月中旬であった。

船で先行した整備員等は既に到着しており、その話では燃料弾薬等は未到着、施設機材とてスコップ、つるはし程度との事。基地には朝鮮空司令部が所在し、頭数は揃っているものの、艦が無くなり陸上に上げられ、俄かに航空を勉強している連中で、話も仲々思う様に通じない。基地の兵員は半数以上が半島人であって、而もその半数近くが不明確な病室通い。全般的に士気は極度に低下、聊か末期的症状を呈し、基地からの期待は全く考えられず、我々は独自で作業を開始しなければならなかった。

飛行場の台地の直ぐ下に、浦項の街に通ずる一寸広い道路があり、これを誘導路に利用する事とし、飛行場からの通路を取り付けた。

一方道路沿いの松林を切り開き、繋留地帯、掩体壕をどんどん造り上げる事にした。七、八月の真夏の暑さは格別、搭乗員、整備員の炎天下の汗だくの土方作業で、概ね八分通り終った処で、十五日の終戦を迎える事になった。

八月九日、ソ連は一方的に日ソ不可侵条約を破棄し、火事場泥棒的に満州国に侵入。悲愴なニュースが断片的に入って来るが、地続きながら如何ともし難く、ただ切歯拒腕するのみであった。処が八月十二日、四国松山基地に展開していた我が第七二一航空隊（神雷部隊）の司令岡村基春大佐から、私宛に至急電報が到着した。「貴官は所在兵力を以て、速かにウラジオストックを爆撃すべし」と。全く予測もしていなかっただけに、これは大変な任務だと思わず武

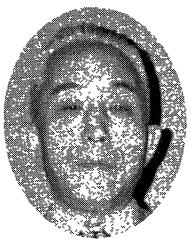
者振いをした。聊か国民の要望を背負った気にもなった。ウラジオへの初攻撃。

然しウラジオ附近の資料は皆無、基地の状況を調べれば、保有燃料は四機にて目的地迄は一撃半程度。爆弾及び搭載機銃弾は全然在庫なし。更に爆弾投下用器具は小松基地には有るが之も無く「桜花」懸吊器装備の儘では爆弾攻撃は出来ない。早速小松基地に移動し、小松からの発進を意見具申したが、何等返事が無かった。結局この攻撃企図は更に上級司令部の知る処となり、それは熱血漢岡村司令の一矢を報ゆるべき独断命令との事で、小松の本隊から中止命令が届き、ウラジオ攻撃問題は遂に幕切れとなった。

僅かに四機では蟷螂の斧であったにせよ、仮にウラジオへの攻撃が実施された場合、事の成否は別として、対ソ終戦処理にどのような問題を残したであろうか。このような迎日基地での数々の思い出には聊か感無量なものがある。

「海軍生徒」

太田定夫（一中四十六回卒）



スマートで目先がきいて、
きちょうめん

負けじ魂、これぞ船乗り

スマートな短剣に若き日の生きがいを感じて舞鶴の海軍機関学校へ入校。それより海軍生徒時代を含めネイビイ（海軍）生活六年たらず。その間頭にたたきこまれた筈の軍人勅諭、生徒訓など記憶の一片すらない中に不思議とこの言葉だけは忘れられぬ。

〃これをスイーマンシップという〃

この短かい言葉の中に若き日の魂をゆさぶる何ものかがあったのかもしれない。

この機会に他人様の経験されなかった海軍生徒生活のほんの一コマの紹介を……

鉄拳制裁

覚悟はして入校したがこれ程スゴイものとは思わなんだ。舞鶴は鶴が舞うどころか鉄拳が舞っている所。これが入校後の偽らざる心境。

海軍生徒一学年時代の一日を大雑把にみても、早朝起床ラッパで跳び起き洗面所へ行く途中遅いといわれ先ず一発。朝の体操に向う中央廊下で次の一発。掃除で上級生徒に箒・雑巾をもたせたといって全員整列一発。朝食前整列で何だかだと週番生徒の挙げる注意事項の網にかかって一発。昼食前に歩き方が悪い服装にしまりがないとか何処かで眼をひからせていた最上級生徒に見つかって一発。午後の訓練時の緊張が足りない、元気が無いとかで全員整列一発。就寝巡検前の廊下整列は三省や五省どころか十省位させられ総員一発。これでも一日最低七発。

巡検前の連続パンチで口の中が血だらけになりベッドの中でこの血をすすりながら寝てしまった記憶がある。入校以来四百何十発までカウントを数えていたが馬鹿々々しくなってやめてしまい、あとは自然のなりゆきにまかせたものだ。

いまの過保護ＰＴＡが聞いたら何と言うだろうかね。

白旗一流

入校時身につけていた衣服はパンツにいたるまですべて故郷に送り返し、着用するのは上から下まで官給品。「緊褌一番」の名のとおり一番下は越中フンドシからはじまる。紐を前で結んで後から前へクルリと持ってきてはさみこめばそれでよし。ところがこの単純明解な着用法もはじめはのみこめぬイイウチのボンボンあり。後から前へを、わざわざ紐を背中で結んで前から後へもっていったのでサア大変。

朝の起床動作であわてふためいたその御仁ズボンの上から白旗一流のフンドシを翻えし廊下を駆け抜けて行った。風にひらめく白狐の尻尾か、源氏の白旗か。

たちまち最上級生徒にとっつかまり大猛省をうながされたが、ここで生徒館の語り草がまた一つ生れた。いわく略して「逆フン」こと逆褌。ボンボンえらいことになってしもうた。

羽田の日航機事故で「逆フンシャ」なる言葉を聞いたとたん、四〇年以上昔の「逆フン」とあまりに似ているので思わずその御仁の顔が目に浮んだ次第。

――◇――◇――◇――

たしかに海軍生徒時代は自己没我に徹し、能力の限界まで身体を動かしていた。

ただ、今となっては、そこにただようペーソスとささやかな笑いも含め、わが「青春賦」の貴重な一頁を飾ってくれる。

〃草笛や空に一はけ飛行雲〃

一枚の名刺

梅村澪子（通信十四回）

昭和二十九年八月末に私は北海道に渡った。薄田研二が主宰していた劇団中芸（中央芸術劇団の略称）が、炭坑を中心に約一ヶ月の北海道巡演を行った。木下順二作「彦市ばなし」藤田あさや作「冨士山麓」の二本を持って廻った。私は「彦市ばなし」の子天狗と「冨士山麓」のパンパンガールの二役を演じた。終演地は旭川であった。劇団は現地解散の形をとった。一行二十数人のうち、東京で映画などの仕事のある者数人は先発、帰りを急がない九人が一体となって一日阿寒湖に遊んだ。

私はこの旅に出る前に金沢の劇団の先輩から一枚の名刺を貰っていた。函館に近い森町で診療所を開いていらっしゃる山科雄平先生宛のもので、名刺の裏にメモがしてあった。

「この娘たちはビールが好きです。ご馳走してやって下さい」

阿寒湖の帰り、私は二人の女優さんをさそい、この名刺を持って森町駅に降りた。九月二十六日昼頃である。海辺のこの駅はすでになま暖かい風が吹き、波しぶきがあがっていた。男五人と女一人の劇団員は車窓から手を振って、森町から急行で一時間で着く函館に直行した。青函連絡船洞爺丸は、十三時、十五時、十七時の三つの急行の客を乗せて、台風の眼を想わせる静かになった海へ向って、十八時半に函館港を出航し、二十二時五十分七重浜で沈没した。死者千百五十五人、生存者百十六人、世界最大海難事故のタイタニック号に次ぐ惨事であった。劇団員六人の遺体はサルベージによって船底から引き揚げられた。「海峡」という映画の冒頭のシーンは、台風一過の七重浜だった。私はこの映画を観てすぐ北国新聞夕刊の「舞台」に〝一枚の名刺〟と題して寄稿した。今日まで私が芝居を続けてこられたのは、まさにこの一枚の名刺のおかげである。

一昨年劇団北陸新協は五十周年を迎え、松田章一作「島清世に破れたり」を記念公演、五十年史の刊行、その他の行事を盛大に行った。全国の地方劇団で五十年の歴史を持つのは北陸新協だけである。これは劇団関係者だけの力でなく、実に金沢の人たちが今日まで育てて下さった賜ものだと思う。とりわけ戦後数年のお客さまとの交流はたいへん熱いものがあった。金大の伊藤武雄先生、金沢工大の青山兵吉先生などは、官憲や特高に囲まれた戦前の舞台から応援して下さった。

五十周年はまた新しい時代に向けての出発点でもある。中央からのすぐれた舞台を沢山観られるようになった現在、地方劇団はアマチュアといえどもある程度のレベルと、特色を持って舞台を創って行かなければお客に見放されてしまう。

富山は今たいへんな演劇フィーバーで、県・市などの行政がらみで盛大な演劇交流がなされている。また福井は宇野重吉さんや水上勉さんなどの指導を得、活発な動きがあると聞く。残念ながら金沢はいま一つ活気に乏しい。

六月十八、十九、二十日に北陸新協、アンサンブル金沢、ピコロの三劇団が合同で芝居をすることになった。井上ひさし作「イーハトーボの劇列車」を婦人会館で上演する。稽古の初日から、一劇団で得られない活気がみられて、良い芝居になるのではないかと期待している。八月三十、三十一日には金沢出身の作家で俳優である和沢昌治さんと私の朗読会が香林坊一〇九ホールで予定されている。小劇場は新しい試みができる。大和でも香林坊で三百人劇場ができると聞く。金沢の演劇状況の活性化の一助になればよいとおもう。

同窓の集い

◇一中三二期生 全国大会の記

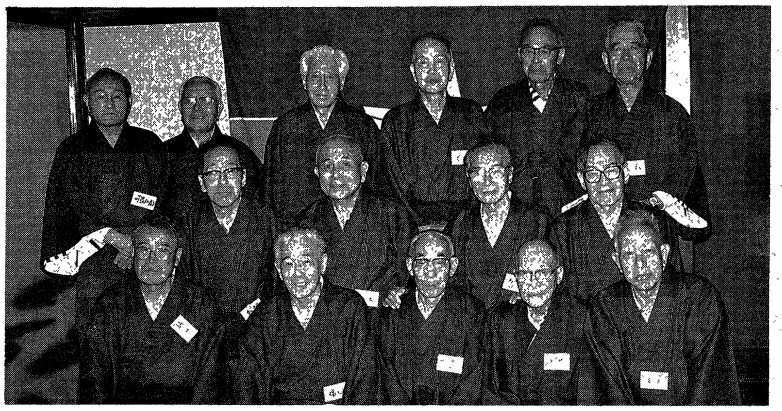
期日　昭和六十年十一月十、十一日
会場　粟津温泉　法師旅館

日時と場所は前年決めた通りで、これは遠来の連中が法師を頗るお気に召された事と、那谷寺の紅葉を観賞したいとの要望に応えたのである。

会報一泉を見る限り、全国的会合を催すのは我々の期が最も古いようで、それだけ毎年参加者が減じ、今回は十五名（外に竹田夫人）に過ぎなかったのは淋しい限りであった。尤もこの一年間で六名も物故されたので、已むを得ないと思うが……。

当日十五時の受付にも拘らず、定刻幹事が着いた時には既に六、七名が温泉にひたり丹前姿で寛いでいるので一驚した。年寄りの閑か、日曜の持て余しか、何れにしても夕刻参集の通例が適用しない齢頃と痛感した。

定刻六時に一中校旗を掲げた広間に集合し、記念撮影の後開会した。恒例により常任幹事より諸般の報告があり、続いてお互いが寄る年波で同窓会を懐しむピークを超えたと見え、会合の出席も会費の拠出も著し



く減じたので、六一年は兎も角、六二年以降の同期会は、解散も含めて在り方を見直す可きだとの爆弾的意見が申添えられた。

次いで地元代表として太田真一君より、県外代表として宮川正澄君より挨拶があって、お互いの健康を祝して乾杯の後開宴した。

お色気の方はとうの昔に卒業した連中だが、朋有りて遠方より来る、亦楽しからづやとあって、若い妓は招かずともお互の献酬で酒は大いにはずんだ。酒間で幹事の爆弾発言に付いて談論風発したが、結論を得ないまま九時となったので、校歌合唱、万歳三唱で閉会した。

翌朝八時、朝食を摂りつつ結論として「六一年は地区会合にとどめ、全国大会は催さず、会報一泉の配布その他通信連絡は従前通りとする。明後六二年以降は、同期生全体の動向その他の情勢を見極めた上で、適切な方途を決める」との極めて政治的な玉虫色の申合せをして散会した。要は自分の健康維持に危惧を感じ、満八十歳を迎える明後年には果して健康であり得るか誰れにも自信がなく、誰れか元気で世話をやいて呉れる者があればという他力本願の共通意識が働いた結論であった。若い期の人達には笑止千万の事だが、何れ一度は突当る同期生会の避けられない宿命的問題でもある。

朝食を終って九時に宿のマイクロバスで、有志十二名に竹田、本部夫人の紅二点も参加されて那谷寺に向った。前晩欠席された大島勝比古君が、那谷寺の檀家総代であることから、出発前に宿まで来られて、案内役をして頂いた。バス十五分で雨の那谷寺に着いた。大島君の肝煎りで、住職のお住居に招じ入れられた。住職の木崎磬山師は、山代温泉の開業医である同期生木崎俊雄君（上京中で欠席）の甥御で、その母堂は同君の令妹に当る。この奇縁を述べて大島君から住職と母堂を紹介された。客間でお茶を頂いて一服したが、雨が熄みそうもないので、傘をさして寺僧の案内で境内を一巡した。冷雨が可成り繁く、遊仙境はじめ一山の紅葉は真に美しかったが、岩肌が滑るので岩窟の札所巡りや白山堂展望台の登攀を見合せたのは心残りであった。一巡して祈願法会道場の華王殿で、住職の読経にて物故同期生を回向し合掌瞑目した。

次いで書院裏の指定石庭園を経て、琉美園（釈尊生誕地ルンビエンに因んで大島君が命名した）の清流と奇石を賞し、幽邃閑寂の了々庵で一服のお茶を頂いた。

雨中とは謂え、花山法皇開山以来の名苑を心行く迄味わうこと二時間で、元の住職のお住居に戻った。

客室で裏千家名誉師範の大島宗古（勝比古）宗匠のお点前で、酒脱なお茶の講義を拝聴しながら抹茶を頂いた。床には芭蕉直筆の「塚も動け我が哭く声は秋の風」の句軸が掛けられ供茶された。芭蕉が陸奥遊行の帰途金沢に立寄り、弟子一笑が既に半歳前に没したのを知り、野田山の墓前で動哭した時の句で、我々が亡き同期生の霊を回向したのに因んでの心遣いと承り深く感銘した。「聖の茶」と絵葉書のお土産を頂くなど、手厚い接待を謝して同寺を辞して正午解散した。

尚有志七名は更に寺井町に車を馳せ、県立九谷焼技術研究所と町立九谷焼展示館を見学して、本大会の全行事を了えたのは午後三時であった。

大会参加者は次の通り。

石田国太郎、大島勝比古、大嶋勇政、太田真一、可長乙吉、清水弘、柴田喬、下村節義、新谷桂三、武内瑛麿、竹田喜久三、福田久太郎、本部均、松井清志、宮川正澄、吉田直茂、竹田夫人、本部夫人

尚本大会二日後に、宮川正澄君（がん研究の碩学）の学士院会員選出が報道されたし、大島勝比古君が一週間前の文化の日に、金沢市文化賞を受けられたので、同期生の誇りとして追記する。

（吉田直茂　記）

◇第十四回 一中三三会有馬大会報告

期日　昭和六一年五月一五、一六日
場所　有馬温泉「欽山」

大正十五年三月、若気のいたりで卒業式をボイコット、記念写真も残さず本多の森を巣立って将に還暦の六十年。本年は標記有馬の地で総会開催。参加者数は図らずも会名と同じ三十三名。

十五日午後三時半、新大阪駅集合、地元会員に迎えられて空港交通のデラバスで一路有馬温泉へ。一浴少憩後六時半から総会開催。

地元松本幹事の開会挨拶に次いで、藤田幹事から年間の会務、会計報告。終って関東地区近藤幹事の音頭で乾杯。酒は特別に準備された地元灘の瞬間凍結の生原酒。

飲む程に酔う程に、歌あり、踊りあり、謡曲ありで、傘寿を数えた者とも思われぬ元気者揃い。流石に人生将に八十年時代か。例によって母校応援歌、校歌の合唱で盛況裡に閉会。

当日斉唱の恩師を偲んでニックネームを歌い込んだ「箱根の山」の替え歌を披露する。

一中先生讃歌（井口政雄幹事作）

校長はオコゼの吉村さん
渡辺ブラマに橋センマ
藤井のガンマに西崎ニンマ
板坂サンマに辻アンマ
トーチン、ウグイス、パーンジュ
船橋、チョイトコ、神経
山賊、松尾、イボニ～やオッポ
長谷にズベチン、鏑木さ～ん
トリヤに馬鹿中
山岸さんにハクチン、不景気
ツ～ノダシ、ダルマさん
デモさん、茶ビン
三浦、鬼瓦
松本エテコ、気チガイ、カッパ
日置さん、マツコ
ゲンビに日野さん
ム～ジナ、エ～ナンヤ

本多の森の夢はるか

翌日の朝会で来年の開催地は一応中京地区と定め、期日その他は一切本部幹事一任と決定。

朝食後、一同打ち揃い前日のバスで六甲山展望台まで登ったが、相憎の深いガスと寒さで、売店の熱いコーヒーだけが唯一の慰みとなる。山頂をそこそこにドライブウエイを下山、灘の菊正宗酒造記念館を見学。ここは三百年余の伝統ある嘉納家の酒蔵を移築したもので、講堂館柔道の創設者嘉納治五郎先生ゆかりの名家でもある。

神戸ワシントンホテルで昼食少憩の後、かつては「小寺邸」として知られた「相楽園」を見学。ここは元神戸市長小寺謙吉氏の先代所有の約六千坪の広大な庭園、豪壮な邸宅だったものが、戦前神戸市に譲渡され、以後重文の船屋形、旧ハッサム邸や厩舎等が移築されて一般に公開されているものである。

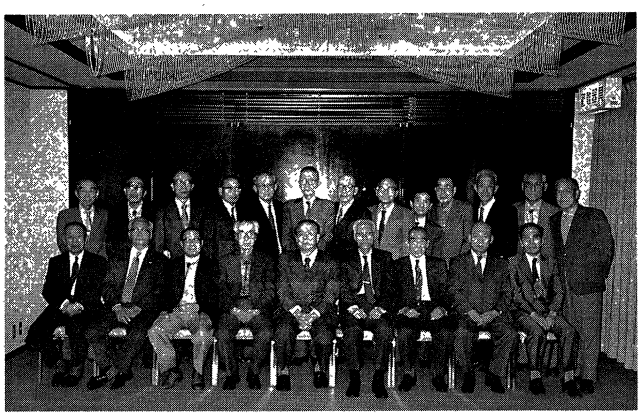
午後三時次回を約して新大阪駅で解散。

今回の参加者氏名は次の通り。

松本正雄、石田聖夫妻、宮村外雄、免田良太郎（以上関西）、近藤師家司、安田俊雄、山田義孝、村上外雄、村又吉、高田小市夫妻（以上関東）、米林栄（旭川）、小出武夫妻（長野）、和田光夫妻（高岡）、井口政雄夫妻、池田知雄夫妻、伊藤進、岩城谷博、宇都宮亮一、岡田一男夫妻、辻義雄、川西弘晃、西村四郎市、村尾泰、村上進、藤田誠一夫妻（以上金沢）。

（藤田記）

◇三五会のつどい（昭和三年卒）



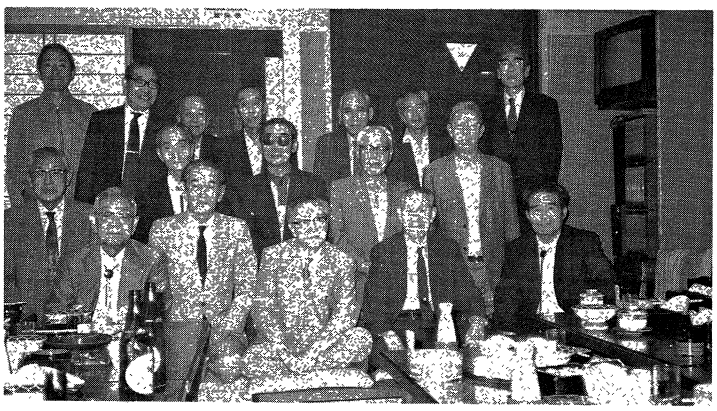
五月十七日、年一回の総会を今年も駅前ホテルニュー金沢で開いた。

昨年の二六名にくらべ三名減の二三名の出席。この月のはじめに幽界に去った島村信介君など周りの者の欠けていく淋しさを誰もが感じながら開宴に先立って物故者九四名に心からの黙禱を捧げた。

来々年の昭和六十三年は卒業六十周年を迎えるのだから何か愉快な記念事業をすることにしてそれまでに計画を練ることを約し六時半閉会した。三年前から宴会は四時からとしその前に二時から同じホテルの喫茶室で話合うことにしたのは大変好評で懐旧談、近況の話に花が咲いて楽しかった。遠来の友五名を交え出席者の氏名は左の通り。

牛塚藤雄、松村　博、福田重一、越田喜久治、増村尚武、以上県外
板垣吉兵衛、松井順孝、梶本国男
居村喜久治、作本秀雄、結城与久
嵯峨　通、大浦喜三郎、内田暁太
南部貞一、笠野外喜夫、桜井喜文
池谷一雄、木戸哲二、出口一彦、
杉野　啓、市島亀太郎、大森玄衆

（幹事　大森記）



◇六桜会の集い（一中三十八回）

この春の叙勲に、六桜会々員の中から二人の受章者がでた。元国立東静病院長で静岡在住の奥原政雄君が勲二等瑞宝章、東工大名誉教授の小松勇作君が勲三等旭日中綬章をそれぞれ受章された。

たまたま小松君が金沢工大へ講義のために来沢するとの報せをうけ、六桜会では早速この機会をとらえてお祝いの会合を催すこととなった。

七月二日急拠金沢在住の会員に呼びかけ香林坊の魚半に集った。会合した会員二十名、その中に当時の恩師宮沢外与治先生を交えての祝宴となった。

このところ七十歳を超えた六桜会では毎年叙勲の栄誉を受ける会員がふえて一同を喜こばせる。

この日も小松君を迎えての祝宴で、昔の童心にかえり、自から選んだ職業の違い、頭髪の濃淡を超越しての語り合いは同窓会ならではの風景である。中学校卒業以来、今年で丁度五十五年、永い年月、半世紀を越す今日まで続くこの友情には話の尽きることなく夜の更けるのも忘れての宴となった。

次は来る八月に予定されている六桜会総会で再会することを約して散会した。

（西多記）

◇一中(39回)七桜会全国大会

昭和六十一年六月十三日、時恰も百万石祭りの日、七桜会全国大会を開催した。梅雨の時季とはいえ当日は殊の外好天気に恵まれ、学友嬉々として元一中の運動場であった金沢観光会館前に集合する。本多公園を散策し往時の一中跡を偲びながら定刻に迎えのバスに乗り縁に包まれた百万石城下をあとにして山代加賀屋（宝生亭）に向かう。

車中は五十数年前の若かりし在校時代の話題に花が咲き賑やかな中に十七時宿舎に着く。

一浴して三十五名が出席して総会を開催。今回は関東、関西、九州から十二名の出席あり、五十年振りに会った友もあり懐かしさが顔に出ている。

恩師宮沢先生にもご出席を頂き、先生には今年八十五歳至極ご壮健で心からご長寿をお祝い申上げる次第であります。

昭和二年は我々が一中に入学した年、宮沢先生は一中に奉職された先生一年生。一年生同志というご縁があるようです。

今日先生と共に青春時代を語り合える幸をしみじみ感ずる反面、七十五名の学友は既になく、その面影を偲び心からの黙禱を捧げ冥福を祈る。

「麦笛や　呼び捨ての名の
あまた減り」　狩行

という句が心を打つ。

元気な顔で記念撮影をし懇親会に入る。酒は幹事の肝煎で呑み放題、宴酣となり校歌で出発、応援歌、そして民謡、流行歌、小唄…ＥＴＣ。松任の円八のあんころもあった。七十越してもまだまだ元気だ。

然し病床にあり出席出来なかった学友の事を思い、一日も早い回復を願い又の逢う日を楽しみに待つこと

切なり。

翌十四日も好天、バスでますらおどもが名をとめし橋立の北前船の館、安宅の関を廻り加賀路を一路金沢へ。十二時兼六園下玉泉園に着き、お茶をいただき一服してから、楽しい集いに後ろ髪ひかれる思いで再会を期して流れ解散。宮沢先生、学友よ亦逢いましょう。

かくして楽しかった全国大会は終る。みんなのご健勝を心から祈り上げペンを収める。

出席者名

宮沢先生、伊藤直之、伊藤春夫、池田克巳、岩脇他計雄、瓜生復男、川崎芳雄、国見弘臣、上坂太郎、赤隆、高井誠二、高桑末次郎、高松一吉、高村伊作、高村義次、竹下六都夫、中村敬一、長沼久喜、西田外喜雄、張江啓、春木秀夫、福田外喜二、前田弘、三須外男、南為二、宮野宗一、村上甲子太郎、村下公省、村田尚一、室賀喬、山内英一、吉岡秀雄、吉倉遠次、吉田克巳、山瀬芳男

（山瀬芳男記）

◇四十、四十一回生本多会 叙勲祝賀会

今年度の春の叙勲者として、本多会々長の竹中工務店副社長八十島健二氏が、永年にわたり建築事業の功労が認められ、勲三等瑞宝章を受章されたのを記念し、本多会としてささやかな祝宴を、五月二十八日の夕刻、大阪市南区笠屋町のレストラン「乃呂」において催した。出席者一同八十島氏の栄誉を心から祝うと共に、記念撮影もし、久しぶりに大いに楽しく語り合い、時の経つのも忘れる程でした。出席者は、千田、水落(昇)、能木場、坂、勝木、赤崎、八十島、小泉

（小泉記）

◇松任一泉同窓会

和六十一年度松任一泉同窓会総会が、五月二十九日午後六時から金沢都ホテルで開催された。今年は泉丘高校から草鹿教頭、同窓会本部から渋谷会長、西多事務局長、講師に三菱総合経済研究所常務取締役宮川隆泰氏（一中五十四期）を招き盛大に開会された。

林繁夫会長の挨拶に続いて本部の渋谷会長から祝辞と激励の辞があり総会に移った。総会では大谷渉氏議長となり、昭和六十年度事業・決算の承認、六十一年度事業・予算の審議、役員の選出等、会員の賛同を得て議事を終る。

今年の特別講演は、三菱経済研究プロジェクトチームのチーフとして経済界で活躍の宮川隆泰氏を講師として「今後の経済情勢」と題して、近年の激しく変動する日本・世界の経済の動向と今後の見通し等についてわかり易く解説され一同感銘を深くした。

懇親会では、西多事務局長から挨拶を兼ねて同窓会関係の諸連絡があり、大先輩の三須外男氏（一中三十九期）の音頭で乾盃し、懇親に移った。久し振りの顔合せで盃をくみか

わしながらの同期生の集まり、若い泉丘の女性陣にまじって気焔をあげる頭の白い実年組等…時の過ぎるのも忘れて懇親の輪が広がっていった。たまたま、特別講師の宮川氏や松任市町会連合会会長の板尾氏と同期という事もあって、参議院に立候補された沓掛哲男氏（一中五十四期、七月六日の選挙で二九五、三七七の大量得票で当選）も顔を出され、激励演説もとび出して大へん賑やかな同窓会となった。

最後は一中校歌、泉丘校歌の大合唱でしめくくり本家京子副会長の音頭で泉丘高校の万歳を、西多事務局長の音頭で松任一泉会の万歳を三唱し、お互いの健康と再会を約して九時過ぎ散会した。

◇関西一泉同窓会総会

関西一泉同窓会復活第六回の総会が去る五月三十一日開催の運びとなった。会場は既になじみの梅田新道のビヤホールを借りきり、会員一五〇名が集って盛会をきわめた。

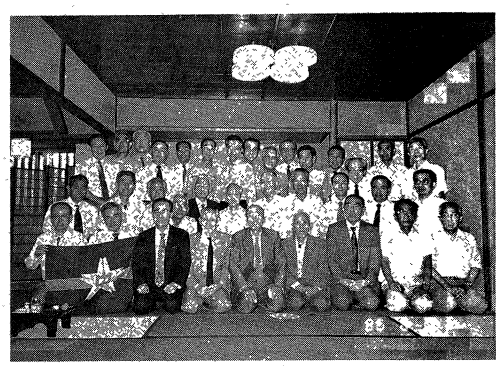
金沢からは来賓として渋谷亮治会長、西多事務局長、学校側からは棒田校長、正村教諭がこれに参加した。渋谷会長よりの祝辞のあと、西多事務局長、棒田校長よりそれぞれ同窓会活動、学校の近況報告あり、春の叙勲で勲三等を受けた八十島会長の栄誉を祝い、ビールをくみ交わし祝宴に移った。

会場には一中第五十一期の中川和雄大阪府副知事も出席しユーモアを混えたスピーチで会場の雰囲気を盛り上げ、引き続き会員の得意の歌を披露するグループで賑わった。

最後の散会には旧金沢一中の校歌、泉丘の校歌の合唱で名残りを惜しみ、それぞれのグループに別れて次の会場へと流れた。

◇桜誓会の集い（一中四十五回卒）

一昨年四十五周年を記念して粟津温泉、法師旅館で開いた桜誓会総会では、五十周年を一くぎりとして以後は先輩各期の例にならい毎年会合をもとうと話合ったのですが、今年は五十周年が待ち遠しく一度集まったらとの声で八月二日、浅野川畔の清風荘で開催した。



横越君、中島（旧下村）君の県外者を含めて三十名出席、今回は私どもが現住所を知り得ている上田、宮沢、吉田、藤田、塚野各先生をお招きした。

開会に先だち別室で一中校舎を本多の森に囲まれた旧本多町から泉野原頭（当時はそうであった）に移転したときのビデオ（約二十分）を観賞、画面に現われる広坂通り、香林坊を通っての引越風景や、日常の各部の活動、昔の各種式典など当時を懐しく思い出し、あちこちで「アレは誰や…」「〇〇君か」「ア、△△先生…」の声が発せられ、短い時間であったが楽しく懐しく観賞した。

終わって懇親会に入った。荒川君の世話人を代表しての挨拶につづき石崎君から近況報告、前総会後に稲坂清君、富田隆君、寺田（旧多田）春光君が亡くなられたことを報告、故人の冥福を祈って黙禱を捧げた。

先生のご挨拶を頂いた後乾杯をして宴会にうつった。いつもなら綺麗どころのおねーさん達が入ってくるのに今回は姿がなかった（お互の話合いがはずみ美人のおしゃくは二の次に…）それでも七時すぎから始った会は久方振りの先生との再会で懐古談に花が咲き、いつもは必ず出る蛮声の校歌、応援歌も忘れての歓談が続き、九時すぎ桜誓会の万歳を三唱して散会した。出席者は次の通り。

上田豊信先生、宮沢外与治先生、吉田精三先生、藤田誠一先生、塚野善蔵先生、

相川文雄、浅井治雄、荒川宏、五十嵐晃、石崎皓三、上田栄一、岡島弘、加藤敏行、斉田元広、斎藤晃吉清水重男、隅谷与一郎、高倉健次、高田久雄、高畠三郎、多川直次、谷口俊雄、淡中章二、津川正治、中島栄義、鳴瀬茂男、中村房信、中村忠重、西村寛猛、堀口渉、松本武雄、三田幸一郎、村木文男、八木田喜良

横越英一

（堀口渉記）

同窓会通信

浦　茂氏に記念刀贈られる
―日本刀剣保存会から―

終戦後マッカーサー元帥のＱＨＱからの指令で「個人所有を含むすべての刀剣の破壊を要求する」との内容に対し、美術品としての日本刀の滅亡を防ぎたいと願って、終戦時大本営連絡官としてマッカーサー元帥のＧＨＱとの折衝窓口として終戦処理に当られた浦氏がこのＧＨＱに対して、二ヶ月間筆舌に尽し難い苦労と根気でもって折衝の努力を続けられ、ついに昭和二十年十月二十四日「善意の日本人の所有する骨董品、美術品的刀剣は審査のうえ保管を許す」とのＧＨＱ指令をかちとられ、その後二十一年六月に勅令が発布され刀剣の審査権、所持許可権は一切日本政府自づから管掌し、本間順治氏を委員長とする刀剣審査会が組織され、名実ともに日本刀復帰が実現いたしました。

そして浦氏が陸軍大学ご卒業のとき天皇陛下より拝領された恩賜の軍刀は米軍に没収されたまま還りませんでしたが、思いがけず日本刀剣保存会では同じ作者小谷靖憲刀匠の同年同月日の裏銘のある作品を奇しき縁で入手し、これを研磨完成され、日本刀の未曽有の危機に際し一身を賭して努力された大恩人の浦氏に心からの感謝の意を捧げたいと、この日本刀を日本刀剣保存会主催の第十五回大会（昭和六十一年七月六日、東京都港区の八芳園＝旧大久保彦左衛門邸＝で開催）懇親会席上で記念品として浦氏に贈呈された。

金沢市文化活動賞に
新劇普及の部として
梅村澪子氏が

本年五月、第六回金沢市文化活動賞の受賞者四人のうち、新劇普及振興の部で泉丘高通信制第十四回生の梅村澪子さんが市民文化の創造に対する地道な活動が評価され受賞の栄に浴した。

梅村さんは昭和十四年、劇団北陸新協に入団して以来四十数年間、新劇で数々の名場面を演じ地方のアマチュア劇団としては珍らしい長年の歴史を刻む原動力となった。

このほか、高文連演劇コンクールの審査員として高校演劇の質の向上にも大きく寄与している。

61年度北国風雪賞に
松田　衛氏と馬場　宏氏

石川県内の各分野で長年、ひたすら「地の塩」として活躍、郷土に尽くされた人々の功労をたたえるために、今年も北国新聞社では北国風雪賞として五名の方に賞を贈ることを決めた。この内、次の二氏が一泉同窓会の会員であった。

賞を受けたのは元石川県嘱託、日本野鳥の会石川支部長の松田　衛氏（一中三十八回卒）と土地家屋調査士馬場　宏氏（泉丘高校通信制二十七回生）の二氏。

松田　衛氏は昭和二十一年、日本野鳥の会に入会して以来、自然保護思想の普及に尽し、昭和三十七年から県嘱託を務め、この三月迄石川県野鳥園の管理を全うした。現在は県自然環境保全審議委員、日本野鳥の会石川支部長を務め、イヌワシは松田氏の提唱で県鳥指定になったものである。

馬場　宏氏は自分の郷土である能登半島の方言を愛し、高等小学校卒業後、昭和二十三年に発足した泉丘高校の通信制に入学した。そこで古典に出合って方言に興味を持ち、農業と土地家屋調査士に従事する傍ら昭和三十五年「能登半島先端部の方言分布」昭和六十一年合本「能登の方言」を出版、学会からも注目を集めた。

泉丘高校 連続六十八回出場（最多出場）で表彰

第七十回高校相撲金沢大会

かつて大正、昭和の前半まで金石海浜で開かれていた全国中等学校相撲大会も、今は卯辰山相撲場にと移され、今年は五月晴れの二十五日、第七十回高校相撲金沢大会として開催された。

旧金沢一中時代の第一回大会以来の常連である泉丘高では、今年で連続六十八回出場の最多出場を記録し大会表彰を受けた。

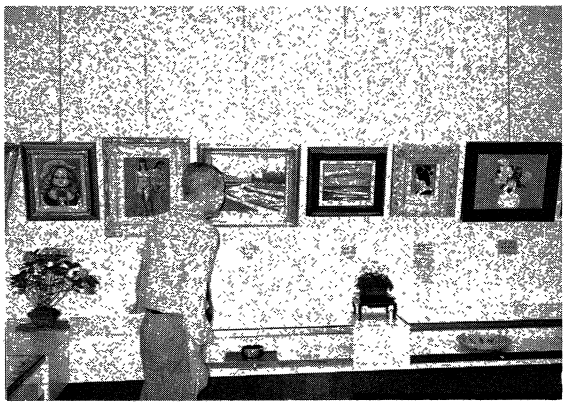
勝負は別として旧一中時代よりの伝統を受け継いで「参加することに意義がある」と闘志を燃した。

団体予選得点表

学校名	都道府県	I	II	III	勝	点
金沢市工	石川	3	3	3	3	9
金沢	石川	3	3	3	3	9
明大中野	東京	3	3	3	3	9
京都商	京都	3	3	3	3	9
七尾商	石川	2	3	3	3	8
羽咋	石川	2	3	3	3	8
泉丘	石川	2	3	3	3	8
北海	北海道	3	2	3	3	8
弘前実	青森	3	3	2	3	8
金足農	秋田	3	3	2	3	8
近江	滋賀	3	2	3	3	8
近大…						

第十回一泉桜美会 夏の小品展ひらく

「絵の同窓会」として発足した一泉桜美会の第十回61年夏の小品展が、このほど金沢市片町北国ビルの北陸電力サービスステーションサロンを会場として七月十日より開催された。出品は宮沢外与治先生の作品をはじめ黒田桜の園外三十数点が展示された。次から次へと鑑賞に集まる同窓会員に会場は狭く、終日賑わいを見せていた。

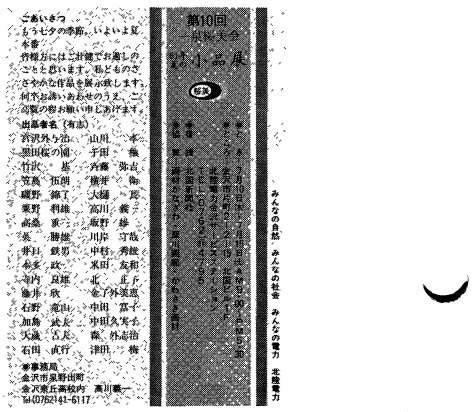


なお、第十四回桜美会美術展は十月香林坊に新装なる大和ホールにて開催される予定。

一中出身国会議員 同時に三名誕生

七月六日の衆参同日選挙において衆議院には一中四十七回卒坂本三十次氏、同五十二回卒奥田敬和氏、参議院には同五十四回卒の沓掛哲男氏がそれぞれ当選された。石川県で一中卒業国会議員が一度に三名も選出されたのは初めてである。

坂本、奥田両氏は七回当選、大臣経験者であり、沓掛氏は初当選ではあるが建設省出身、将来を期待される議員である。一泉同窓会では三氏のこれからの一層の活躍を願い心からの声援を贈る。



泉丘高校野間元太君（二年） 日中高校囲碁大会の 日本代表に選ばる

七月二十九、三十日の両日、東京日本棋院で行われた第十回全国高校囲碁選手権大会の個人戦で、石川県代表泉丘高二年の野間選手は順調に勝ち石川県で初めて三位に入賞し、優勝した早稲田高の高橋君、二位の麻布高の吉田君とともに日本代表として八月十四日から中国で開催する日中高校囲碁大会に出場する。

同窓会 会員名簿について

創立九十周年記念事業の一つとして去る五十八年十月発行した同窓会会員名簿の在庫があります。

ご希望の方は一部三千円（送料込）を振込みの上、お申し込み下さい。

〒921金沢市泉野出町
三―一〇―一〇
一泉同窓会
郵便振替　金沢〇―四二五四
電　話　〇七六二
㊷―〇二一一

今春の国公立大学合格状況

石川県内高校別の主な国公立大学合格者数

（3月25日現在、北国新聞社調べ）

	金沢大	富山大	福井大	金沢美大	富山医大	福井医大	東京大	京都大	一橋大	大阪大	名古屋大	横浜国大	神戸大	北大	東北大	新潟大	筑波大	静岡大	お茶水大	奈良女大	千葉大	信州大
大聖寺	8	7	4	3												2		2			1	
小松市女	2																					
小松	92	26	10	4	1	2	2	4	3	1	1	5	2	4	5	3	4	3	2		2	3
小松明峰	2	4	1	1												1						1
寺井	2	3		4								1										
松任				3																		
明倫		4																				
錦丘	10	24		3			1									1		1				1
泉丘	146	7		3	5	3	6	12	7	14	4	4	9	1	14	2	11		3	1	2	3
二水	122	30		2	2	1				1		2	1	3	1	7	4	1		1	4	2
県工				1																		
桜丘	73	27	1	4	1									1	3	1	1					
金沢西	2	6		3																		
向陽		1																				
羽咋	38	19	2	3		2	2			2		3		1			1	1	2		1	
高浜		1																				
宝来		2																				
鹿西	1	1																				
七尾	46	21					4	1	1	3		2		2	3	5	3		1	1	1	
穴水		2																				
門前	3	1																				
輪島	13	6		1											1		1					1
宇出津		1														1						
飯田	7	4		1							1											
北陸学院				2																		
星稜	24	8	2	3	1						1	1		2	1	1	1					
金沢大付		1																				
金大	31			1	1		26	15	3	5	1	3		2	1		3		4		2	
計	622	206	20	42	11	8	41	32	14	26	8	21	12	16	29	24	29	8	12	3	13	11
昨年比	+51	+15	−5	−10	+3	−1	−3	+5	+7	+4	−9	+1	0	+10	+14	+3	+6	−4	+5	+2	+4	−2

今春の国公立大学合格者
東大、京大、一橋大への躍進目立つ

今年の泉丘高校からの国公立大学（別表二十二大学）合格者数は昨年の調査（北国新聞昨年三月二十九日調べ）に比べ十五人増え、金沢大は一名減であるが東京大二人、京都大三人、一橋大六人、大阪大四人、東北大十人、お茶水大二人などの増が目立っている。

一泉同窓会事務局長交替
―西田氏から堀口氏へ―

昭和五十二年、四井謙次氏のあとを受け継いで同窓会の業務をされていた西多外喜次事務局長がこの五月をもって退任された。

同氏は一中三十八回の卒業でこの間旧金沢一中時代の資料の集収につとめ、会誌「一泉」の発行をはじめ幅広く同窓会活動につとめられた。同氏にはこのあと一泉同窓会副会長として協力を願い、一泉同窓会事務局の業務は堀口渉氏（一中四十五回卒業）が引継ぐことになった。

「一中校舎移転風景のビデオ」
「一中校歌・泉丘高校校歌の録音テープ」

旧一中校舎の旧本多町から泉野出町の現在地への移転風景、一中時代の学校行事等各部の日常活動状況を撮ったフイルム（英元一泉同窓会々長）がみつかり当事務局でこれを再製し保存することにいたしました。

又一中・泉丘高校校歌の録音テープを作りました。いずれもお貸しすることができますので、ご希望の折は事務局までお申し出下さい。

一泉同窓会事務局
電話〇七六二―四二―〇二一一

一泉同窓会東海支部
事務局の移転お知らせ

同会東海支部事務局は千種区末盛通のニュー王山ビル3Fより左記のところに移転いたしましたのでお知らせします。

記

移転先　愛知県名古屋市中区
三丁目十三番十号
金山グランドハイツ五〇一号
松永　清　税理士事務所内
TEL　〇五二
三二一―二九九三
連絡担当　佐溝

あとがき

今年の五月に前任者西多先輩の後をお引受けしてようやく三ヶ月余り、どうやら事務局通いが身についた時、最初の仕事がこの会誌「一泉」十二号の発刊です。原稿の半分ぐらいはすでに集まっておりましたが、何んといってもあとの集稿がうまくいかず、結果的には泉丘卒業生のものがなかった。

今後は充分反省いたします。

そしてこの「一泉」を、発刊の主旨に沿うよう永続させていきたいと思っております。会員各位のご批評、ご叱責をいただき、一層のご協力をお願いいたします。

（事務局　堀口記）